

# ベトナム戦争余話

## サイゴン残照

平川 満 陸士60

はじめに

毎年3月、4月になると必ず思い出されるあるシヨッキングなシーンがある。

1975年(昭和50)4月30日のまさに夕暮れ時、テレビの画面には南ベトナム共和国の象徴である大統領府に、国旗を振りかざし突進する北ベトナム軍の戦車の姿が大きく映し出された。この衝撃的な場面は大きく報道されたので、覚えておられる方も多いのではなからうか。首都サイゴン(現ホーチミン市)陥落の瞬間であった。

ベトナム軍が本格的な進攻を始めたのは3月10日ごろ。それから数えても僅か50日後、れっきとした一つの独立国が世界史からその姿を消した。誰しもが想像していなかった出来事だった。

実は、私は、この北側の奇襲的な攻勢が始まる1週間ほど前、2月27日から3月1日の3日間程、首都サイゴンに滞在していた。そして、4月30日陥落した大統領府は、ちょうど2カ月ほど前、その威容を誇った建物を正門越

しに見てきたばかりであった。

### 内閣調査室勤務と出張命令

当時私は内閣調査室(略して内調)で勤務していた。身分は内閣調査官兼1等陸佐。主たる仕事は世界の軍事情勢の把握。特に米軍撤退後のベトナムの動向については強い関心を寄せていた。

そのような中、私は1975年2月24日から3月3日までの間、東南アジアのタイ、カンボジア、南ベトナム、香港の4カ国への出張を命じられた。それぞれの国の軍事情勢の把握がその目的であった。私も内調勤務2年近くなって少しは余裕ができた頃であった。ただ、出張間近になって、カンボジアの情勢が悪化(ポルポト軍が首都プノンペンを攻撃)してきたので、この国への出張は取り止めになった。

### ベトナムの軍事情勢概観

当時の情勢は次のようなものであった。

●1962年(昭和37)以来、米軍が本格的に介入したベトナム戦争は、1973年(昭和48)2月28日のパリ和平協定が発効するまで約12年間戦われた。その間に360万人のベトナム人、5万8千人のアメリカ人の命が失われた。だが決着がつかず米軍の撤退を

もってその暮を下ろした。しかし、その後も依然として南ベトナム軍(以下南越軍)と北ベトナム軍(以下北越軍)の相互の牽制、陣取り合戦は続き、ま決という構図であった。

●私が出張することになったこの年の年初(1月中旬から2月初め)にかけて恒例的に行われていたテト攻勢も規模が小さく、その後も静穏の状態が続いていた。北側と連携し南ベトナム領内で活動する無気味な存在の南ベトナム民族解放戦線(以下解放戦線)にも特別な動きはみられなかった。

2月中旬から3月初めにかけて、ベトナムにはかつてない平穏の時間が流れていた。後から考えると、それは束の間の平和、嵐の前の静けさというものだった。

### ベトナム入りとサイゴンの第1日目

タイ・バンコクの視察を無事に済ませ、2月27日バンコクを出発、昼前にサイゴン空港に着いた。タイ・バンコクとは全く違う緊張感が感じられた。日本大使館の防衛駐在官黒田1佐が待つておられた。黒田1佐(海兵・陸士59相当・京大。以下黒田さん)は、3年ほど大使館で勤務、ベトナムの軍事情勢についての権威者。近く帰国予

定で後任も内定していた。また私的には、東京・中野区上高田の防衛庁官舎で隣組という仲。会えるのが楽しみでもあった。

まず大使館訪問、大使にご挨拶。その説明があった。その要旨は、解放戦線の動きは掴みにくい、大勢としては落ち着いた状態である、と。私どもが把握していた情勢より特に踏み込んだ内容のものはなかった。

そこで、私は改めて今回の3日たらず(実質1日半)の視察で、何ができるであろうか、改めて確認することにした。単なる観光で終わらせてはならない。絞って考えた結果は「ベトナムの現状、特に米軍の去った南越軍は、果たして独力で戦える意思、能力があるのだろうか」。極めて抽象的で大雑把なものではあるが、少なくとも肌でも感じ取って帰ろう、と気を引き締めた。

日本大使館訪問という行事も無事終え、今晩宿泊する団営のホテル「マジエスティック」に案内された。ホテルはサイゴン河に面しており、道路を隔てた川幅約400mほどのサイゴン河には、海岸監視艇らしい中小の艦艇15隻ほどが静かに停泊。緊張感らしいものは何も感じられなかった。私が滞在中南ベトナムの軍隊というものを見たの

は、後にも先にもこの一度だけだった。国営というこのホテルは、フランス植民地時代に建てられたものらしく、5階建てほどのもので重厚な雰囲気、それらしい品格が窺えた。宿泊手続きを終え、黒田さんとは夜の予定等を打ち合わせ、一旦お別れした。

案内された私はまず驚いた。日本ではせいぜい和式二間の旅館か、ビジネスホテルぐらいしか知らない私には、その広々とした洋式の部屋、高い天井、その天井にぶら下がっている2機の大きな扇風機。いかにも常夏の南国仕様である。部屋の半分は、3〜4人はまとめて寝られそうな特大ベッドがどーんと置かれ、また部屋のもう半分にはシャワー室とトイレがカーテンで仕切られてあった。もの珍しげに見て回ると、この時ビデ付き洋式トイレなるものを初めて見た。その広い空間に独り置かれて私は落ち着かなかつた。この初めての外国体験は、田舎者の私にはまず初めて体験したカルチャー・ショックといえるものだったろう。

優先。赴任直後の奥様の苦勞は大きく、それにも慣れたころには帰国というパターン。多くの外国駐在経験の方達から共通して聞く話である。すっかりご馳走になった後、市内の日本料理店に案内された。日本人ママが経営しており、席数も結構多く賑わっていた。酒好きの黒田さんの話も面白く、興味深いものが多かった。そのうち、「あの奥の方にいるのは南越軍の猛将として有名な〇〇將軍でラオス系の人だ」。見ると、4〜5m奥のテーブルに大柄で日焼けし、眼光鋭い今風に言えばラグビーの猛者のな軍人が歓談していた。一見して好感と期待感を抱かせるものがあつた。

サイゴンの夜の街の賑わいのひと時を味わせてもらった後、ホテルに帰った。一息つくとともに、今日の一日の忙しかったいろいろの出来事を思い出しながら就寝の準備をしていた。夜も10時近くになっていた。突然、沈んだ響きでそつとドアがノックされる音を聞いた。「何事」と身構える思いでドアへ近づき覗いてみたら男性が立っていた。先方からの挨拶でこのホテルの支配人ということが判った。招じ入れテーブルを挟んで坐った。大変リラックスした態度だった。まず彼は、太平洋戦争時の日本の軍隊が優しく立派だったことを子供心にも覚えてい

る、という話から始め私もホッとした。それが一段落して、「実は計算尺の使い方でも聞きたいことがある」と切り出し、話の内容が変わった。そして小さい計算尺を私の机の上に置いた。例の竹製の計算尺で、自衛隊でも野戦特科の射撃指揮(FDC)や測量等で計算用に使っていたあの種のタイプのものであつた。「これでホテル代の計算ができないか」というのが彼の質問だつた。私は、この珍問には詰まつたが、「料金計算は無理ではないか。それより今流行のポケット型の計算機の方が良いのではないか」と言つてその場を切り抜けた。

ホッとした瞬間だつた。彼の眼が急に真剣味を帯びた。「今ベトナム政府は大変腐敗している。ゲン・バン・チュウ大統領は膨大な資産をアメリカに移し、また彼の子供達をアメリカに留学させている」など厳しい批判の言葉を並べた。私はじつと聞いているしかなかつた。これが言いたかつたのか。しかしその内容は、既に新聞等でも報じられているもので特に目新しいものはなかつた。彼は15分ほども出ていった。

もうこれで今日は終わりか、と就寝準備のところ再びドアのノックの音がか聞こえた。午後10時をまわっていた。何か忘れ物でも、とドアを開けたところ愛想笑いをした若い女性が立っており、「入つてよろしいか」と聞いてきた。一瞬私もたじろいたが、そこは私も情報屋。話だけでも聞いてみるかという好奇心にかられ入室させた。対面した彼女は20歳前後か、美人だつた。私も遠慮せずに家庭事情や、市民生活などを聞かせてもらった。父は軍人で戦地。彼女が母と弟妹の生活を支えているということだつた。そのうち彼女がそつとテーブルの上に置いたものがあつた。2枚の名刺である。見ると有名商社の社員のもので、これには私の方が驚いた。そこで私は即座に言つた。「この名刺はこの人たちがあなたを信用するからこそ渡したもの。他人に見せることはその信頼を裏切つたことになる」と、強く窘めてやつた。彼女も納得した模様であつた。私はこれを機に彼女にはお引き取りを願つた。それにしても、この1時間ほどのこの部屋での予想外の出来事で、何かしら予感めいた不安にかられたのもまた事実であつた。

### サイゴン第2日目

「今日は第一線地域を見に行きましよう」と、9時半ごろホテルを出た。昨夜の件については何も話さなかつた。今日も天気は良く南国の日差しもさわやか。行く先はタイニン省とのこ

午後6時ごろホテルを出た。もちろん部屋に残置した荷物の保全措置等、情報関係者としてやるべきことは忘れずに。

黒田さんの自宅への招待だつた。ご家族とはお知り合いという気安さもあるが、あつて話はずんだ、やはり苦勞話があつた。

黒田さんの自宅への招待だつた。ご家族とはお知り合いという気安さもあるが、あつて話はずんだ、やはり苦勞話があつた。

と。第二線と聞けば緊張する。敵味方相接する危険な地域が連想される。タイニン省は首都サイゴンの北西部に位置し、隣国のカンボジアとは国境を接している。省都のタイニンまで約80kmほど。「危険ではないですか」と聞く。昼間は大丈夫。夜になると危ないという返事。そういえば昨夜も遅く北の方向から遠雷のような砲声が無欠的に聞こえてきた。どちらの側からの射撃かは判らないが、多分牽制目的のものである。片道一車線の道路が続く。走っている車も少ない。車外の風景も変わり映えしない農村風景。どこまで行っても赤茶けた土の色。東南アジア独特のものか。関東ローム層の上に堆積した黒ボク土の土地を見慣れている私にとってその色は刺激的で馴染めなかった。途中2、3カ所ほど日本から進出してきた企業があったが、いずれも小規模の工場らしかった。

やがてお昼近くタイニンの町に入り車が停まった。そこは教会寺院。眼前に見る景色は魔法の国にでも来た思ひ。カトリック聖堂風の大きな寺院が建っていた。カオダイ教の総本山とのこと。カオダイ教という宗教があることすら知らなかった。50歳がらみの僧が待つておられた。多分予約してあったのだらう。その僧が、流暢な日本語を話されたのもまた驚きだった。中に

案内された瞬間、先ずその景観の異様に圧倒された。広々とした堂内の左右には、天井まで届くような立柱がずらりと並び、その柱には巻き付いた竜の彫刻が施されている。そして、教会の中央付近の大きな台座の上には、「一つ目小僧の目玉」そっくり、キラキラ光る大目玉が置かれていた。「天眼」と言いこの宗教の象徴となっている。そしてこの「天眼」を取り巻くように釈迦やキリスト、ヒンズー教などの聖人や教祖達の像が刻まれていて、これをどのように理解すればよいのか分からなかった。広い教会内はガラんとして静寂そのもの、別世界の感があつた。熱心な教会僧の説明も、何の予備知識もなかった私には難解で、ただその雰囲気呑み込まれているだけだった。

第一線地域と言われていたタイニンは、視界に入る村も町もただ静寂。変わった様子は何も見られなかった。しかし反面一種の不気味さ、「狙われているかも」の不安もよぎった。あの米軍さえてこずり、根絶できなかつた解放戦線は、依然として地下トンネルに潜み、村落や林に隠れ機をうかがっている筈である。

もまた只事ではなかつた。戦時中との印象はこれっぽっちも感じられなかつた。私も記念にと名産の螺鈿細工の小箱をひとつ買った。

最後に向かったのが大統領府だった。1908年フランス植民地時代に建造されたもの。正門越しに見える大統領府は、中央に高い尖塔が聳え、残照に映えるその偉容には何かしらこの国への期待感をそそるものがあつた。まさかここが僅か2カ月後、あの北越軍が突入してくる現場にならうとは夢想だにしていなかつた。

### サイゴン第3日目

思いがけない体験をさせてもらったサイゴン。無事に終えた安堵感、満足感に満たされ、黒田さんに見送られて空路最終訪問先「香港」に向かつて出発した。(香港訪問については省略)

### 帰国・帰朝報告

2月27日から3月3日まで6泊7日のタイ・バンコク、ベトナム・サイゴン、そして英領香港の視察を無事に終え、私は満ち足りた気分で見送られた。これら3カ国駐在の防衛駐在官の方達には大変お世話になった。早速上司への報告が待つていた。タイ、香港は特に問題なしとして、ベトナム情勢をどのように報告するかは一

考を要した。結局は見聞きしたことを率直に報告することにした。要約すれば次のような簡単なものだった。

①ベトナムは、国全体として落ち着いていように見える。ただし、ゲン・パン・チュー大統領に対する国民の批判はかなり強いようである。

②米軍がいなくなつた南ベトナム軍は、独力でも戦えるのではない。兵力、訓練、士気ともに問題はないと思つている。

### ベトナム情勢の急変。北の攻撃開始

私が上司に帰朝報告を済ませたのは3月6日ごろだったと思う。肩の荷を下ろした気持ちでいた矢先、3月の9日か10日ごろ、ビッグニュースが飛び込んできた。「北が南・北国境付近で攻勢に出た」というまさに私にとつては青天の霹靂、寝耳に水の情報だった。3日ほど前上司に報告したばかり。それがどんでん返しを食らつたのである。恥ずかしくて「穴があれば入りたい」というみじめな心境であつた。

北越軍は、北と南の境界、非武装地帯(DMZ)北緯17度線を奇襲によつて突破し南ベトナムへの進攻を開始した。戦争においては奇襲の成否は大きく勝敗を左右する。南側がまんまと騙されたということだ。今回と同じような経験を、その1年

半ほど前、私は内調に入った直後に経験した。世界中が驚いた第4次中東戦争（1973年10月）の勃発である。その時も、何の前触れもなく、もちろん心づもりもなかった。私もほうろろたえた。中東についての認識もなく、基礎的な資料さえほとんど持つていなかった。

### 戦況の急速な推移

この戦況の急変は、「一時的なものか、それとも本格的な大攻勢なのか」、その見極めがつけにくく、新聞、テレビ等の報道に頼るしかなかった。しかし、その報道も詳細を欠き、一方的な南側の敗退を告げるものが多く、私どももその判断に迷った。今でもその時の戦況がどんなものであったか、研究したこともないし知らない。ただおおよその推測はできる。

その先例として思い起こすが、終戦の直前、1945年（昭和20）8月9日、日ソ中立条約を踏みにじり突然越境、ソ連軍が満洲国に雪崩れ込んできたことである。まさしく奇襲であった。不意を突かれ政府、関東軍そして多くの在満の日本人達はなす術を失った。なされるがままというのが実態であった。頼りの関東軍も後退を余儀なくされ、その実力を発揮できないままで終わった。

特に民間人の避難、脱出、引き揚げ等がいかに悲惨、非道で多くの犠牲者を出したか。また、60万人とも言われたシベリア抑留者がいかに過酷な労働を強いられ亡くなったか。これらはすでに多くが語り尽くされている。また、それらを実際に経験された現存者もまだ多い。この満洲での悲劇の「二の舞」が演じられたのがまさしく南ベトナム。そう言えば分かり易い。

民族の南北統一を悲願とし満を持していた北越軍は、3月上旬DMZ（非武装地帯）を超え一大攻勢に転じた。と同時に、南ベトナム領内でこの機に乗るのを千秋一日の思いで待っていた解放戦線も、これに呼応して一斉に蜂起した。

一方、虚を突かれた南越側は、まず最初の奇襲の一撃で第一線が突破され、忽ち大混乱を来した。この混乱は、すぐさま第一線近くに居住していた軍人家族に、そして住民などを巻き込み一挙にパニック状態に陥った。パニックが起これたらもはやこれを止める方法はない。これは四方に拡大され、やがて、軍もその家族も、住民も、人車「ごちゃ混ぜ」になり土石流となって南に向かって進み、拡大したと推測している。

### 日本国内での反応

中部の都市ダナン（かつて米空軍基地があり観光地として有名）が陥落したところになると、日本国内でもこの戦況の推移に心配する声が出てきた。知り合いの新聞記者や、現地に進出してある企業の担当者等が問い合わせしてきた。現地の戦況把握をできずにいたのは私も同然だったが、一応次のような見方だけは伝えた。「サイゴンまではまだ500 km以上もある。その途中には山地や丘陵、河川等の障害も幾つかある。そこで阻止、うまくいけば反攻ということになるのではなからうか。南越軍の兵力、兵器、装備そして訓練等も決して北に劣るものではないと思う」と。

後日、その浅慮を恥じ入ることになるのだが、その時はまだ「南越軍の健在」を信じて疑わなかった一自衛官としての見解ではあった。

軍・民区別のつげがたい大混乱、そして後退。この連鎖反応は、軍をも直撃し、士気は一挙に低下。軍は指揮・統制の機能を失い、組織的な抵抗など到底考えられなくなっていた。展開していた部隊も各所で撃破され遊軍化したし、また降伏・逃亡等が続出した南越軍の崩壊であった。

以上が私が推察する緒戦から崩壊までの、戦況の推移と南越軍崩壊の粗筋である。

かくて、怒涛の南進を続けた北越軍は、僅か50日後の4月30日にサイゴンを占領。DMZ（北緯17度）突破から、距離にして900 kmのサイゴンまでを、1日平均約20 km近い速さである。このことからして、「敵はまさにサイゴン・大統領府にあり」と、的を絞って突進してきた北越軍に対し、南越軍が「早急に戦意と戦力を失い、何ら対抗策がなかった」と断定できるのではないだろうか。

勿論、その影には、解放戦線の執拗な攻撃、破壊、宣伝、扇動などがあって北越軍の進攻を容易にしたに違いないのだが。

### サイゴン陥落

グエン・バン・チュウ大統領は陥落の10日前の4月21日に辞任していた。後任のズオン・バン・ミン大統領は、サイゴン陥落の30日に全面降伏した。十余年にわたって骨肉相食む戦いを続けたベトナムでの戦争にも、やっと終止符が打たれた。

### サイゴン陥落直後の大混乱

あまりにも速い首都サイゴンの陥落は、想像を絶する混乱を招いていた。在サイゴンの大使館等外国公館もまた例外ではなかった。そこで起こったエピソードを2例ほど紹介してみる。

(その1) サイゴン陥落の後、半月ほど経った5月中旬ごろであったと思う。日本の某週刊誌に大きく報じられた記事があった。混乱最中の日本大使館に来ていて目撃していた記者の暴露

記事というものである。これには私も正直驚きうろたえた。当時日本大使館もごった返しの状況で、その中で起こった事件の概要は次のようなものであった。「サイゴン陥落の直後、館内は極度の緊張状態におかれ、多数の在留邦人も詰めかけていた。そのような最中、こともあろうに大使館の警備、邦人保護、情報の収集などを率先して担当すべき防衛駐在官が(実名を挙げず)、泥酔し、「南越軍のだからしない負け方を罵倒、悔しがついて」と。そして、その防衛駐在官の無責任さをなじるというものであった。この記事は、私の職場でも話題となり、私にも上司からのお尋ねがあった。私は率直にその人柄を話し、悔しさまぎれの飲み過ぎではなかっただろうか、と弁明をした。酒豪ではあったが明るい性格の黒田さんにとつては、時と場所を間違えた一生一代の不覚であったことは間違いない。

(その2) 東西冷戦の真つただ中、勝者北ベトナムがどのような仕打ちに出るかはその報復を恐れた。アメリカは、自国民をヘリコプターや海軍艦艇等を

動員して素早く引き揚げてしまった。他の西側諸国の公館では、残留か撤退かをめぐり動揺していた。日本大使館も同様であったが、残留することになった。

そのような中、私の職場のある人から次のような話を聞いた。韓国政府から日本政府に対し、在サイゴン韓国大使館職員を日本大使館へ避難させてもらえないか、という趣旨の相談があった。しかし日本政府はこれを断つたらしい。その理由は分らないが、多分韓国がベトナム人から嫌われているからではなからうか、と。そして、かつてベトナム戦争中、韓国は白虎、猛虎という精鋭2個師団をベトナム中部に派遣していた。この部隊が大変勇猛で、北越側から大変に恐れられていた。今回その仕返しがあるのではないか、それを心配しての相談だったのでは、と穿つた見方を付け加えてくれた。余談になるが、この戦争が終わった3年後、私は陸自幹部学校(市ヶ谷)で黒田さんと同じ職場で勤務したことがある。その時はベトナム戦争に関して一言も話をするとはなかった。黒田さんも故人となられて久しい。

### 戦後の過酷な共産化政策

サイゴン陥落とともに戦争は終わり、翌1976年(昭和51)4月に南北統一選挙が行われ、7月に国名を「ベ

トナム社会主義共和国」として新しいスタートを切った。サイゴンの陥落から1年3カ月目である。かつての大統領府は、ホーチミン市人民委員会庁舎となった。

その1年余りの間の南側に対する共産化施策はまことに厳しいものがあつたと言われている。強制的な思想改革、過酷な労働、私有財産の廃止など旧軍人、役人、企業、一般市民を問わず急進・過酷で多くの犠牲者も出た。これらの圧政に耐えられなくなった人達は、船で国外脱出を試みたが(ボート・ピープルと呼ばれた)、また多くの海上遭難者も出て世界の大きな話題にもなった。

これらの戦後史を聞くとき、私はかつて私があつたあの国営ホテル支配人、若い女性、そしてタイニンのカオダイ教会で日本語で話してくれた僧、また日本料理店で見えた日本人ママ、それに南越軍の猛将、これらの人達に、その後どのような運命が待っていたであらう、と思いを巡らすのであつた。

### おわりに

れつきとした一つの民主主義国家が私共の近くで滅亡した。現代史でも希有なことである。私共は極く近くでその事実を見、多くの教訓が含まれていることを理解している。今やベトナムは、東南アジアでの最

も経済発展の著しい国として注目を集めている。そして一番の親日国家とも言われている。多くの若者が日本の貴重な労働力として寄与している。ベトナムという国は極めて日本に近い国となった。

私はここ10年ほど前までは「もう一度ベトナムを訪れてみたい」と強く思っていたが、我老いたりでそのチャンスを失ってしまったようだ。そのような心残りもあつて、ベトナムの思い出を記事として残しておきたい、と一念発起して綴つたのが本稿である。もう45年も前の回想であり、記憶も不確か、加えて93歳という年齢では筆力も衰え読むに耐えないものになったかもしれない。しかし、私にとつては渾身の作業であつたことは間違いない。

### 補記

1 マジエスティック・ホテル 45年前に訪れたサイゴンのホテルで受けた私のカルチャー・ショックは、小さくはなかった。それは、私が何の予備知識もないまま一人ぼつちにされたせいだと思ふ。このホテルの当時と現況を知りたくなつて探したところ適当な資料があつた。旅行案内「世界の歩き方D21(ベトナム2018〜2019年版)ダイヤモンド・ビッグ社刊である。「サイゴン」の地図を開くと「マジエスティック・ホテル」は、サイゴン川

に面しまさしく現存。1925年創業とある。そしてホテルの紹介として、「歴史を物語るクラシックな雰囲気とゴージャスなインテリアが溶け合う新館と旧館がある。客室はともにウツディな調度品で統一され、二重窓で防音対策も万全。屋上のバーからは眼下にサイゴン川のナイトライフが楽しめる高級ホテルである。これから推して、ここは当時から格式のある国営ホテルだったことがうかがえる。このようなホテルを選定していただいた当時の日本大使館のご配慮に改めて感謝申し上げます。

2 「カオダイ教」とは 1919年、ゴ・ミン・チエンにより唱えられたベトナムの新興宗教。タイニン省を中心に信者約300万人。仏教、キリスト教の多いベトナムでは数パーセントという少数派。キリスト教、仏教、イスラム教、ヒンズー教、道教を取り混ぜた混合宗教。宇宙の至上神は人類を救済するためにこの地球に三度現れたという。一度目は西洋ではモーゼ、東洋では釈迦。二度目はキリストと老子。三度目がカオダイで地球の宗教を統一して人類を救うという思想が中心になっている。前に述べた大きな目玉は、カオダイ教の象徴で「天眼」と呼ばれ、今でもここはタイニン県の観光スポットとして有名のようである。

(以上2020年2月20日93歳6月)